



キン
抜粋
体験版

近
改造
造

1



？ ？

「よし……なんとか間に合いそうだな」



白衣の男はにやりと片頬をあげると、黄色い
スーツを身にまとった、宿敵のひとりへ視線を向
ける。

彼女はマッハイエローこと黄川田実琴（きかわ
だ みこと）。この男、プロフェッサー右京（う
きょう）が身を置く組織、『ウォルフラム』の野
望を打ち碎くために結成された、マッハレンジャー
の一員だ。



彼らはウォルフラムとの死闘を繰り広げ、数多くの怪人を斃してきた。しかし、右京が立案した巧妙なる捕獲作戦の罠にはまり、とうとうマツハイエローが敵の手に落ちたのだ。



右京の実験施設へ運びこまれた実琴はいま、ベッドの上で眠っている。捕獲直後に打たれた昏睡剤のせいだ。しかし、覚醒用の薬を与えない限りは目を覚ますことのない効き目の強いものを使ったのに、彼女の眠りは浅くなりつつある。さすがはマッハレンジャーに選ばれし強者だ。



ただ、 そう感心もしていられない。 ここで実琴に目覚められるとやっかいなことになる。 そういう前にやるべきことはやっておかないとなない。 幸い、 なんとか準備は整った。



右京

「では……マッハベルトに接続開始」



右京がコンソールの右端にあるレバーを手前に引くと、マッハイエローに向かってチューブが伸びていく。



実 琴

「つ……んんつ……」



チューブがベルトに触れると、その先端がぐるりと回転して強引に接続を果たした。実琴はうめき声を漏らしたが、まだ目を覚ましてはいない。



右京

「接続完了！ ラバー展開っ！」

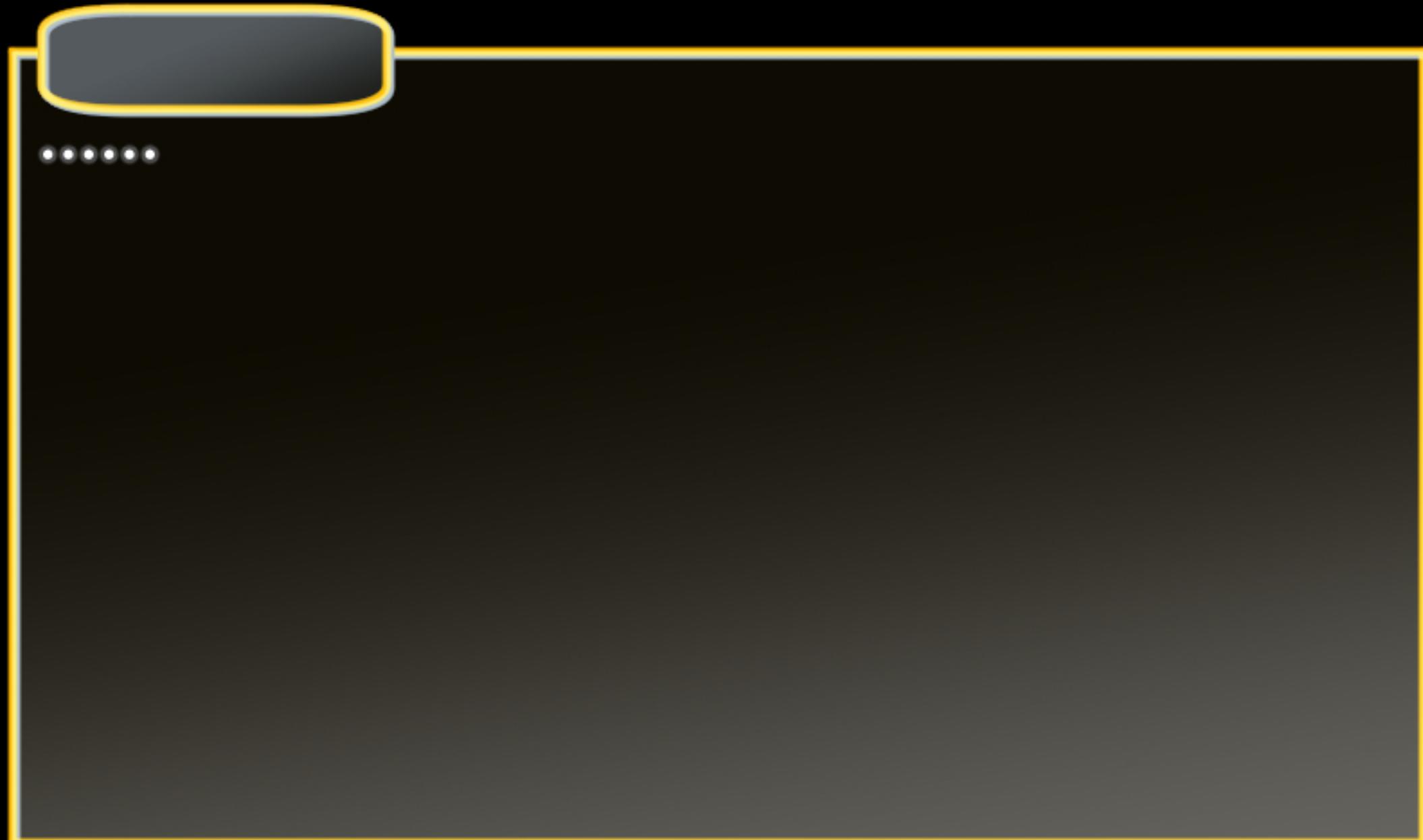


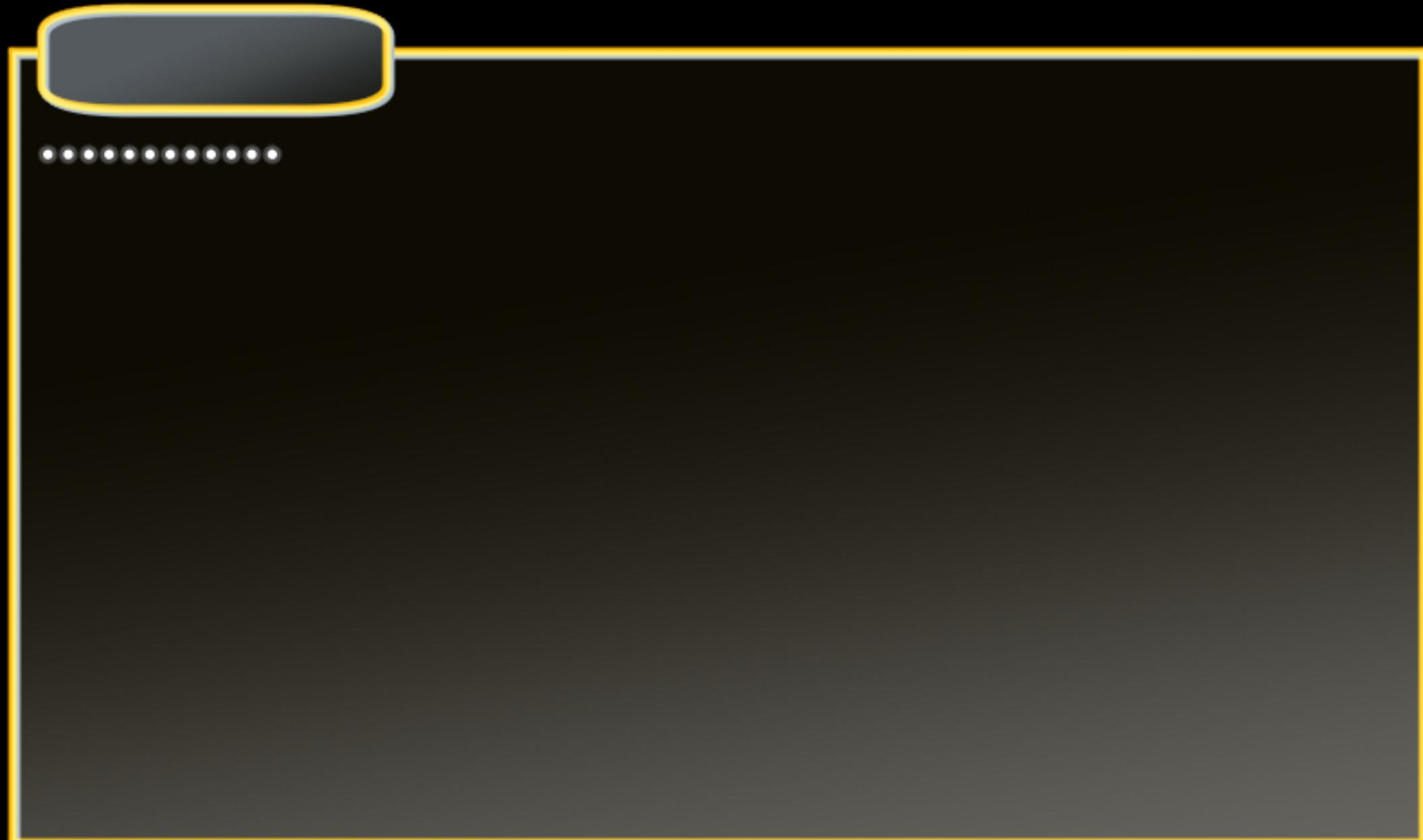
右京はさきほど操作したレバーをさらに一段上げた。

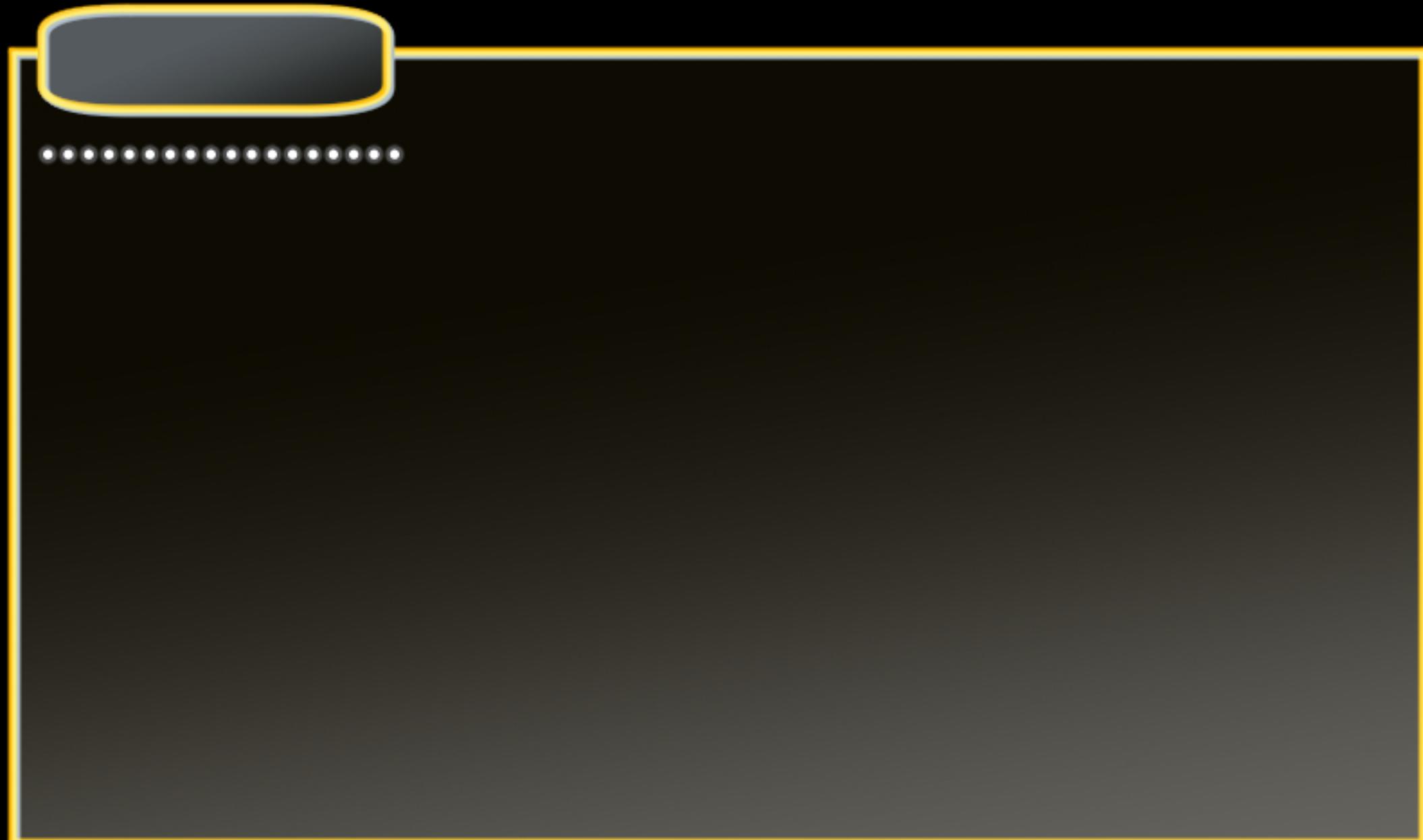


実 琴

「ひっ……くっ……」









右京

「さあ、新しいマッハスーツのお披露目だ」



実 琴

「いやあつ、やめてつ、やめてえええええ！」



室内に響く実琴の悲鳴を聞きながら、右京はレバーを操作した。
瞬間——



実 琴

「いやあああああああああああああああああつ!!」



ラバーとチューブが消え去り、変形したマッハスースが姿を現した。全裸でこそなかつたが、局部がぱっくりと露出していて、よりいやらしく見える形状になっている。



実 琴

「いやあああああああつ、見ないでつ、見ないでえ
ええつ!!」



実琴はとっさに大事な部分を隠そうとする。しかし、ラバーが消えたというのに、身動きひとつとれなかった。



実 琴

「あああっ、どうしてええええっ!?」



右京

「マッハスースがおまえの身体を縛りつけている
のさ」



実 琴

「そっ、そんなっ？」



右京

「いまは俺がスーツを制御しているんだぞ？ なんら不思議なことではないだろう？」



実 琴

「つ……」



目の前にかざされた変身アイテムのレプリカを見て、実琴はあらためて残酷な現実を認識する。あれだけ頼もしかったマツハスースは無残に変形し、自分の敵に回ってしまったのだ……



右京

「しかし……なかなかどうしていい身体をしてい
るじゃないか。驚いたぞ」



実 琴

「ああっ、いやっ、もう見ないでっ!!」



右京

「そうだな、もうしばらくこのまま眺めていたいところだが、時間がもったいない。すぐさま改造作業に入るぞ」



滞時空間では基本的に精密機器類がまとめて動作しなくなるので、それらを使う作業は現実世界で行わなければならない。右京は再びコンソールの操作をはじめる。



実 琴

「改造……って、それはしないって話じゃ——」



右京

「脳はいじらないと言ったが、身体については一切言及していないぞ？」



実 琴

「あう、う……で、でもっ……」



右京

「なあに、肉体改造って言うほど派手なことをするわけじゃない。俺との相性を高めるだけだ」



実 琴

「あ、相性？」



そこで、改造機器のセッティング完了を示す
メッセージがモニターに表示された。



右京

「実際に体感すれば理解できる。それじゃはじめ
るぞ」



説明する気がない右京は話をぶった切ると、始動レバーを手前に倒した。低い振動音が響きはじめて、二本の特殊マニピュレーターが実琴の乳房に迫っていく。



実 琴

「ひっ……いやつ、いやつ……いやああああああ
ああつ！」



マニピュレーターの先端部にあるカップが乳頭
に覆いかぶさった。
そして――



実 琴

「ひぐっ——…かつ、は……」



鋭い針が、乳輪と乳首を貫いた。ビクンビクンと痙攣する実琴に、あらたな改造マシンが迫る。



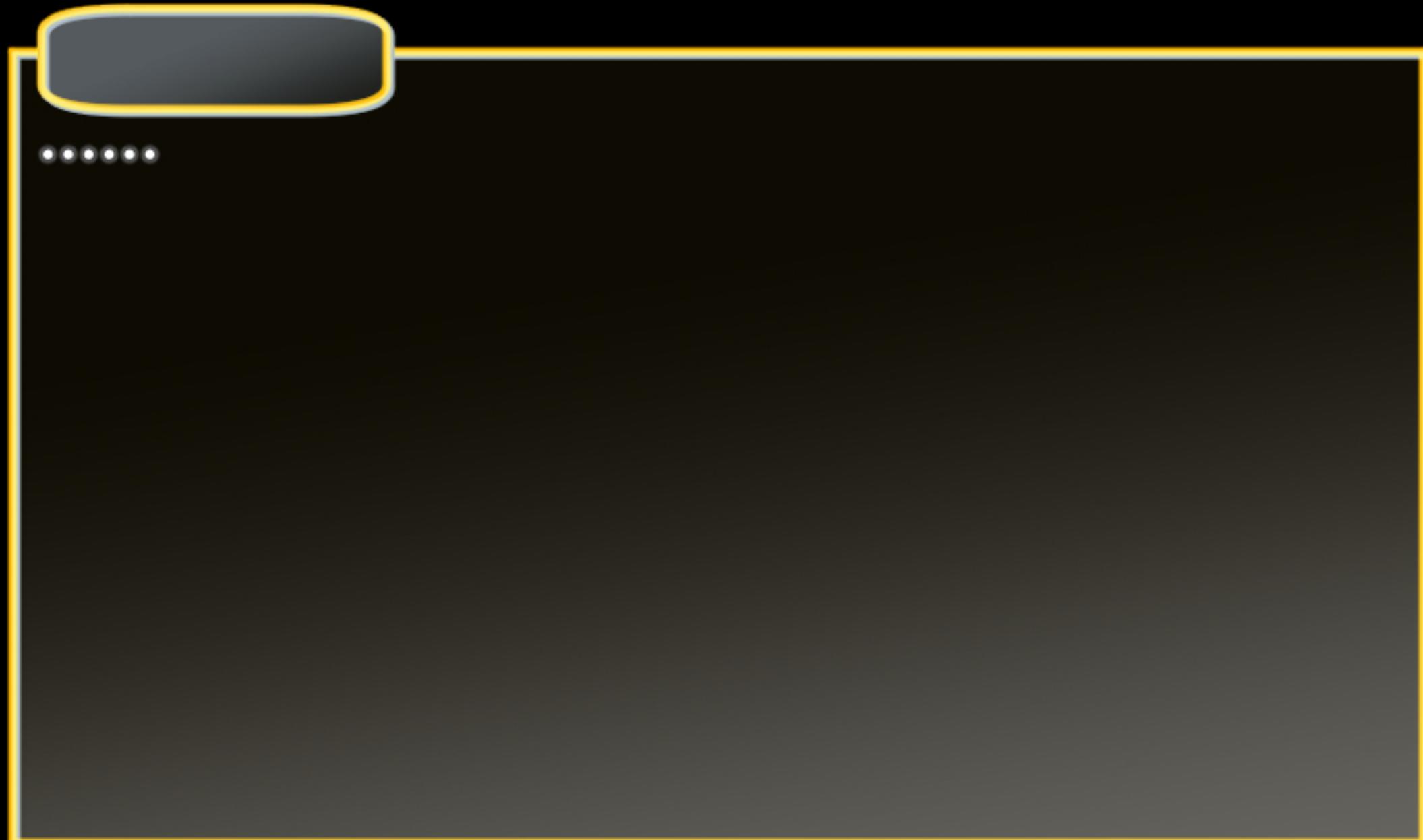
実 琴

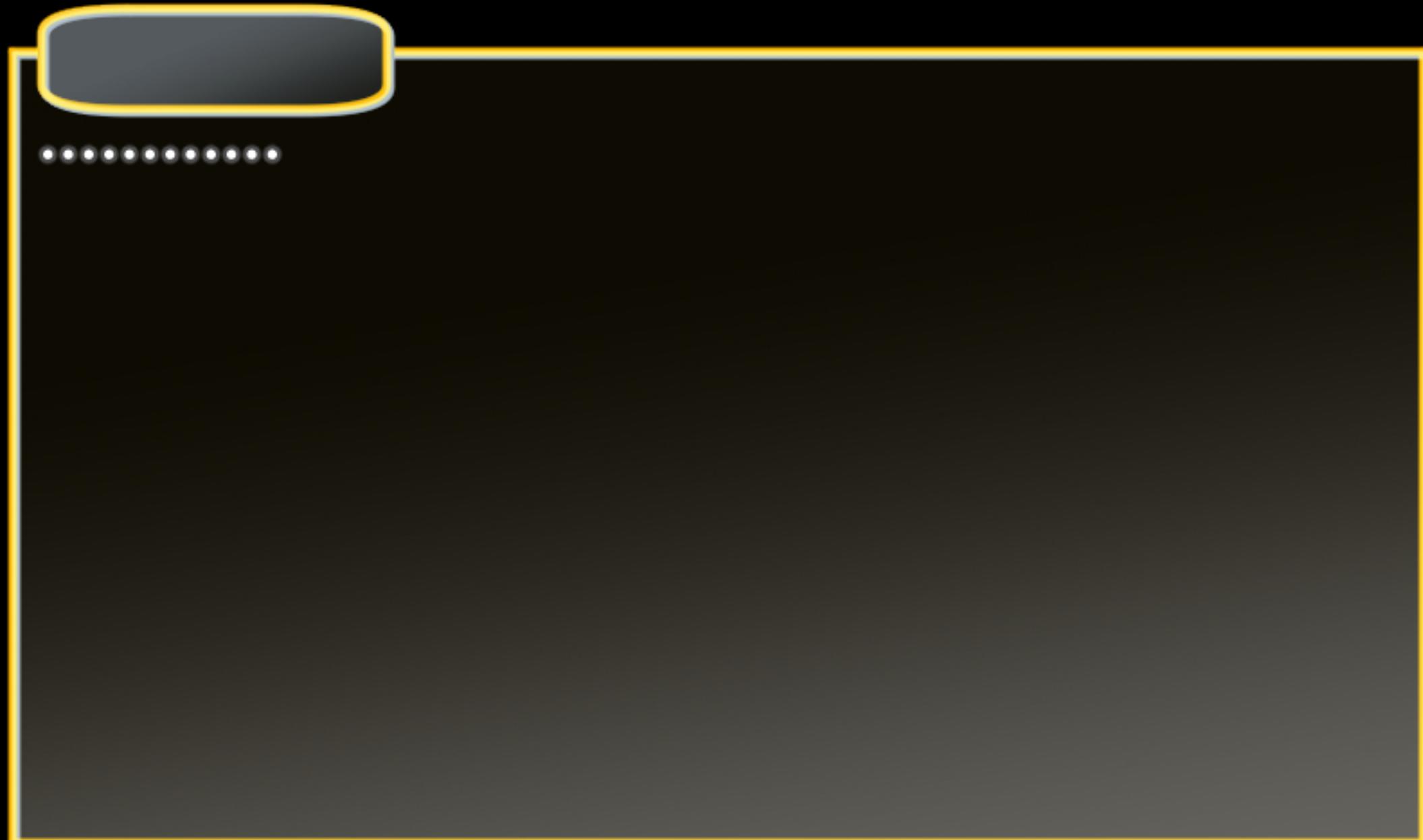
「うっ、くっ……ダ、ダメっ……そこはっ、

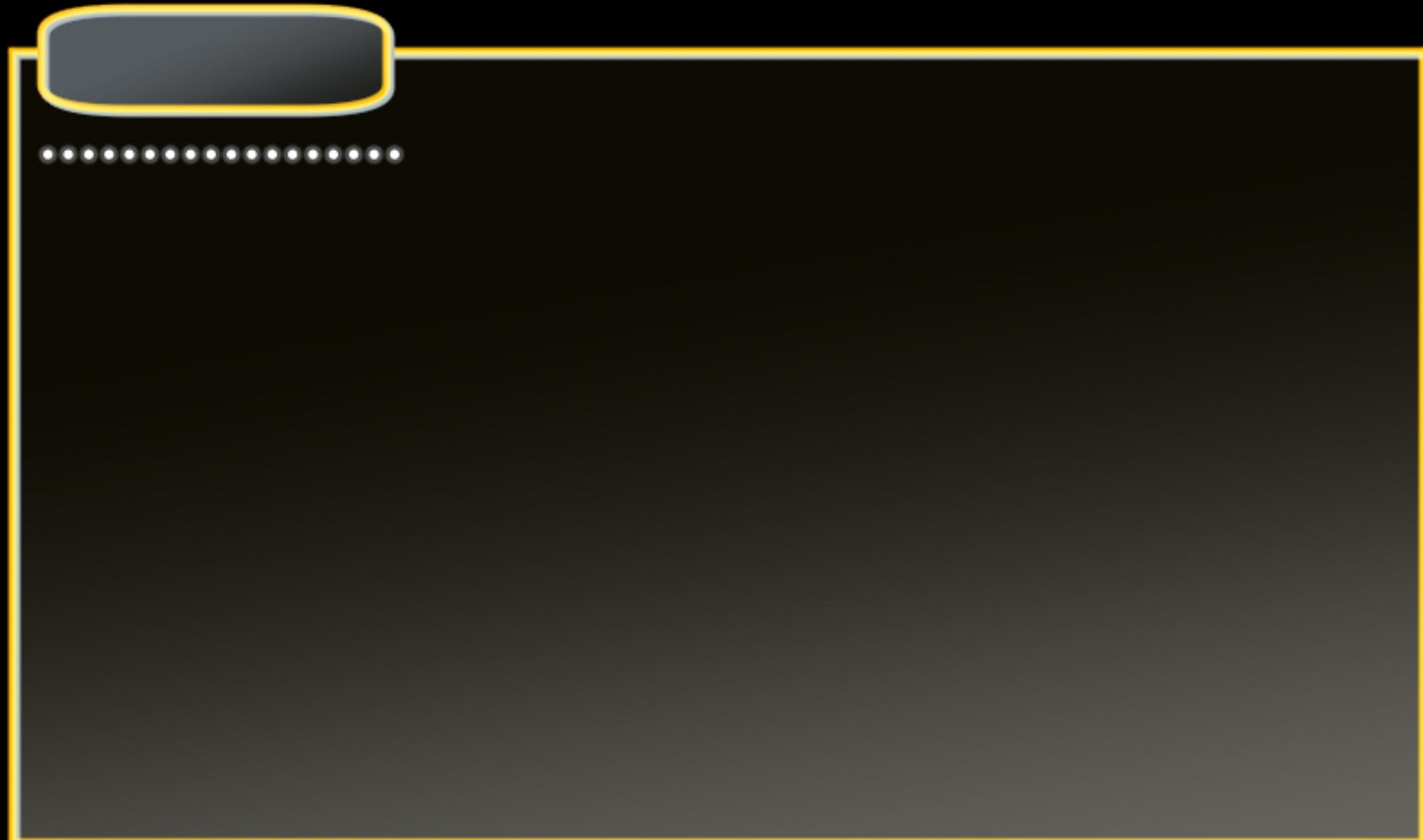


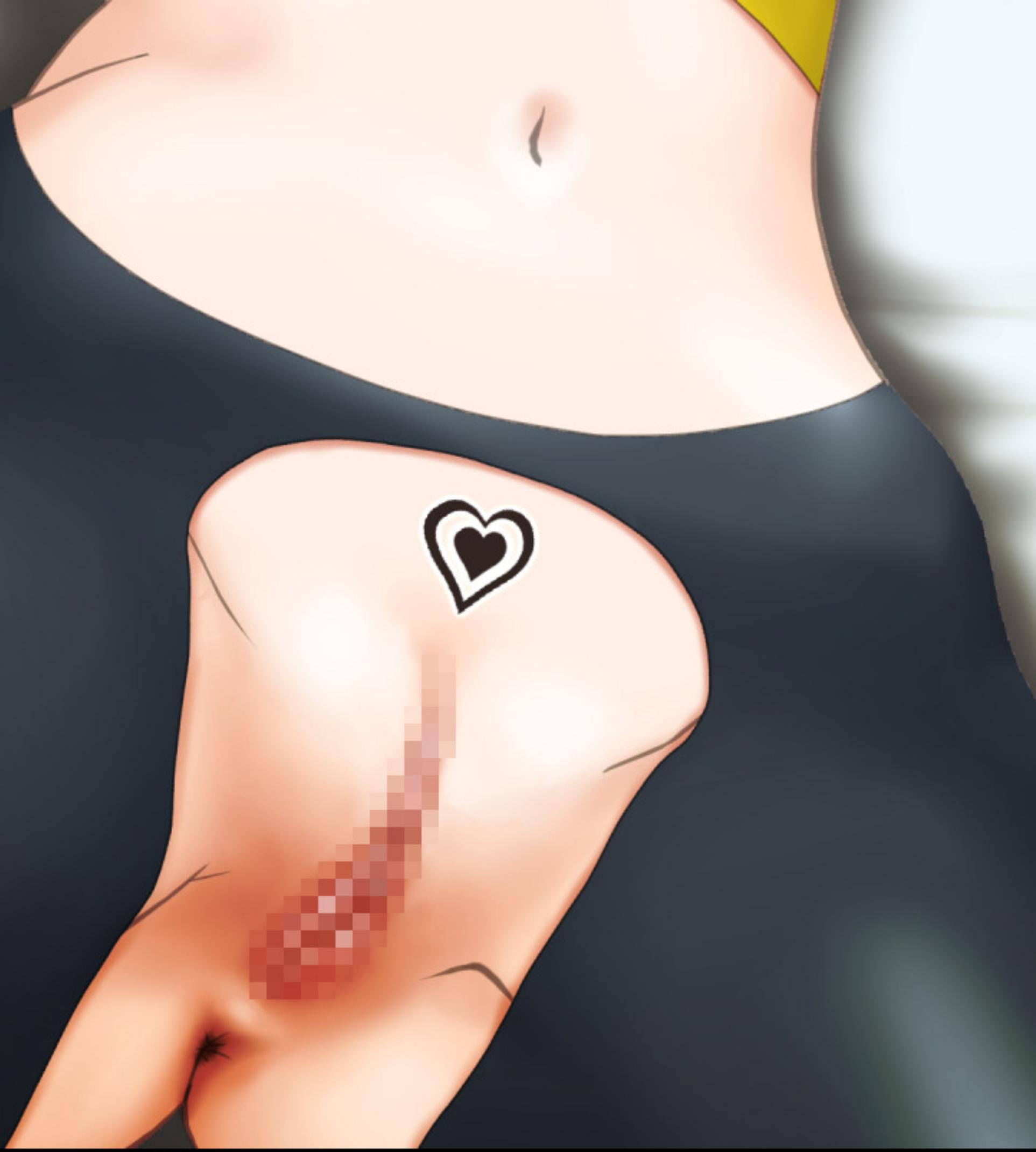
実 琴

「うつ、くっ……ダ、ダメっ……そこはっ、そこ
はダメええええええええっ!!」



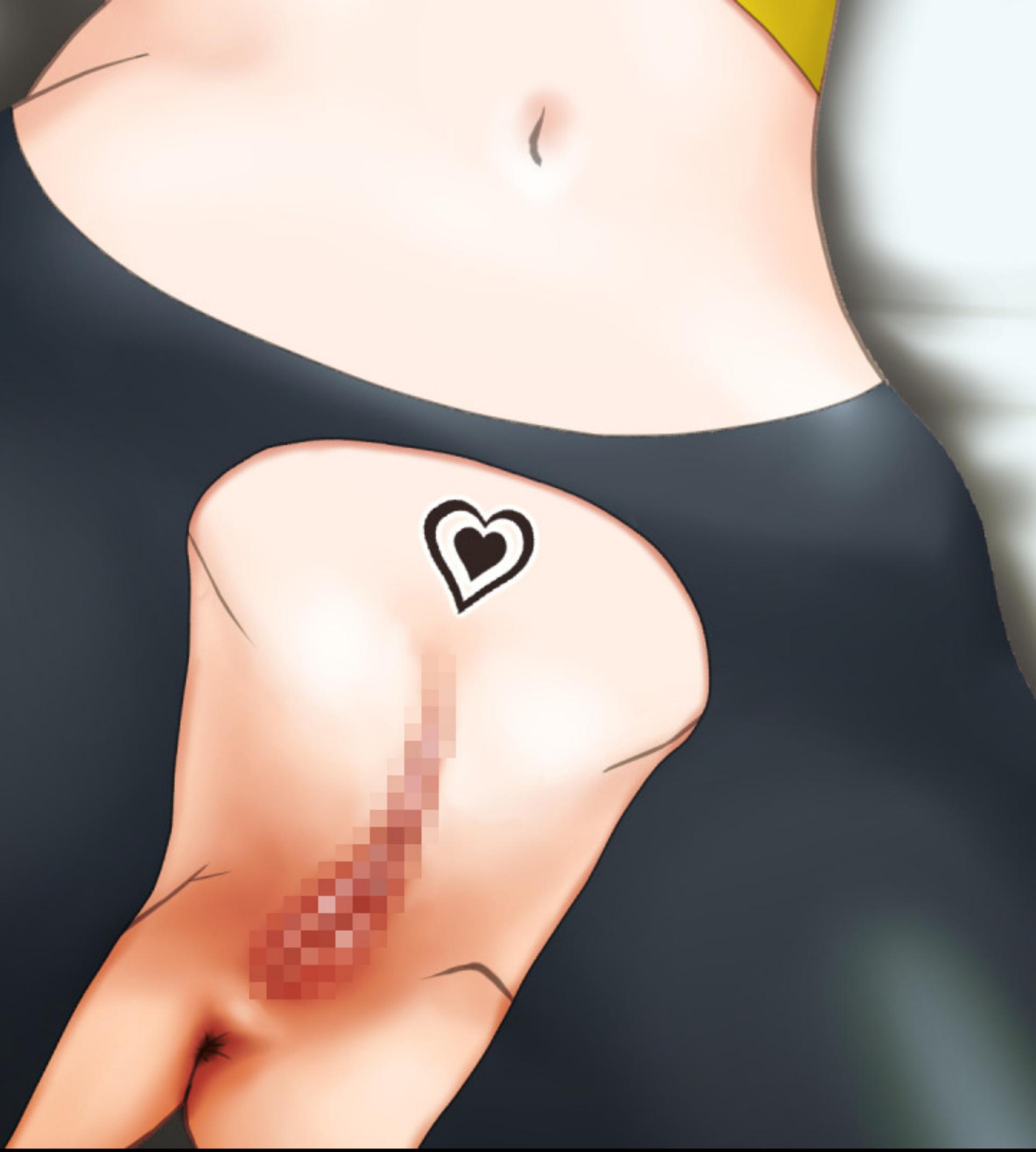




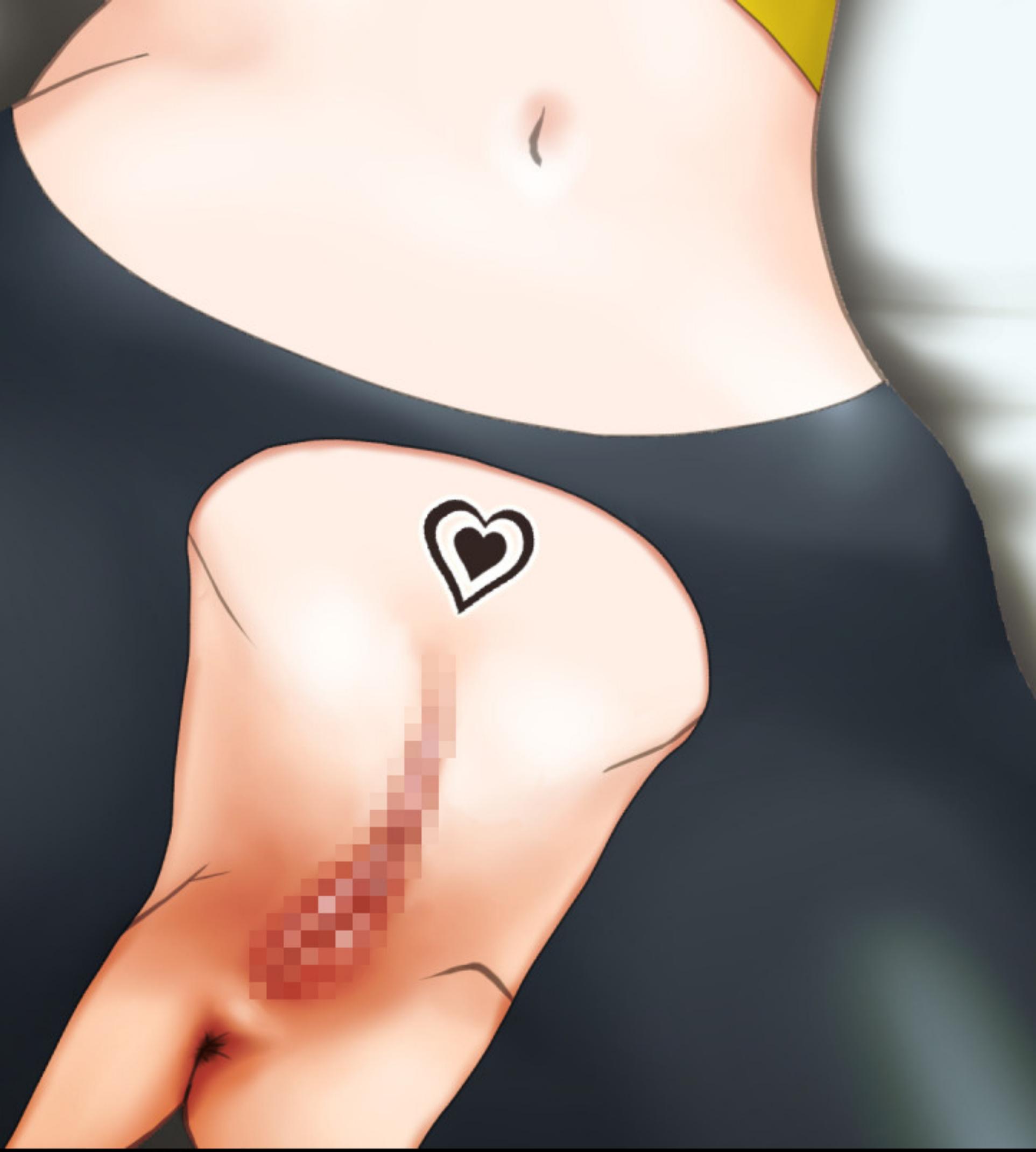


実 琴

「やつ、なつ、なにこれえええつ!?」

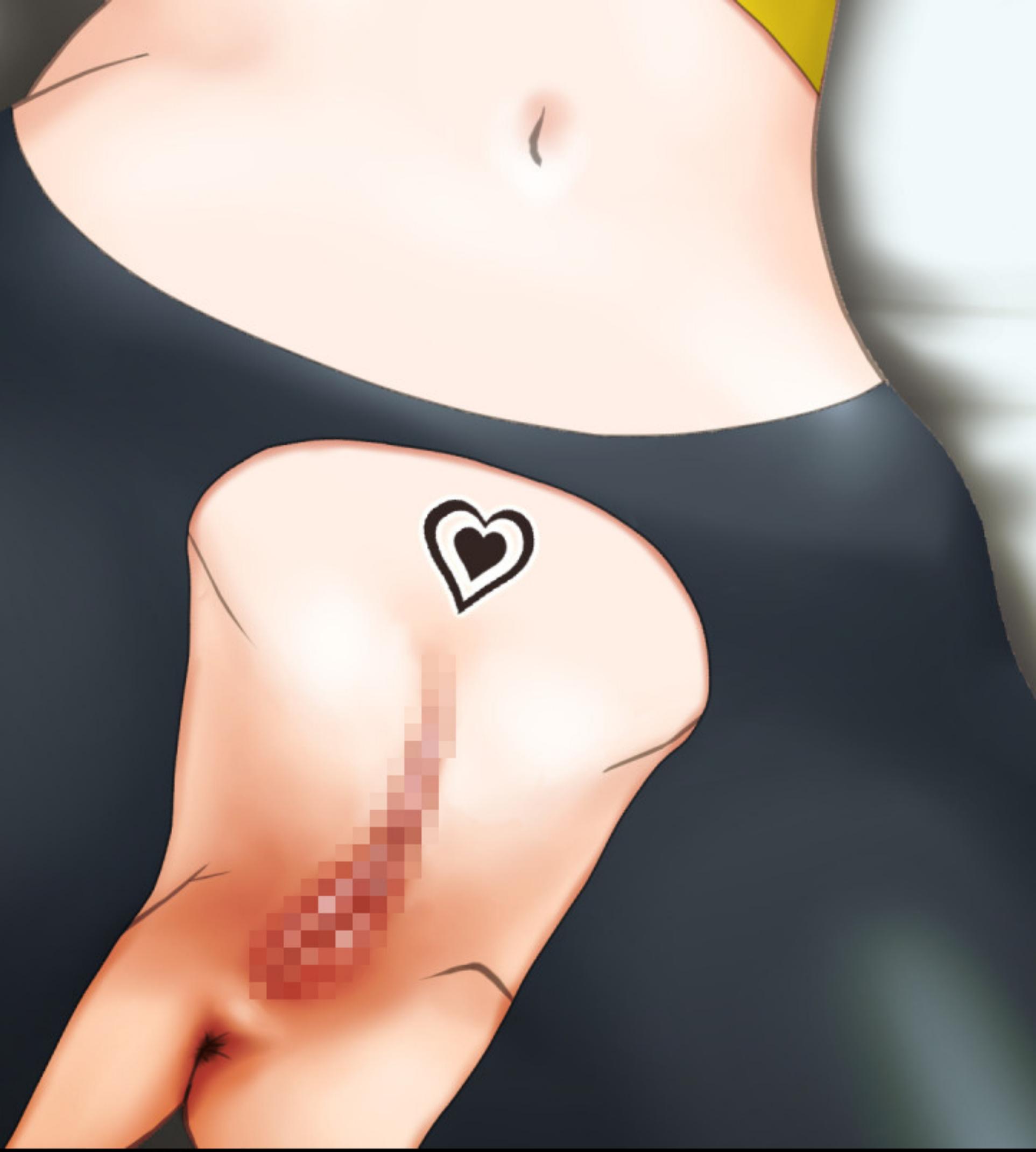


上半身がある程度起きあがったところで、下腹部に浮かんだハートマークが目に入り、実琴は奇声をあげた。



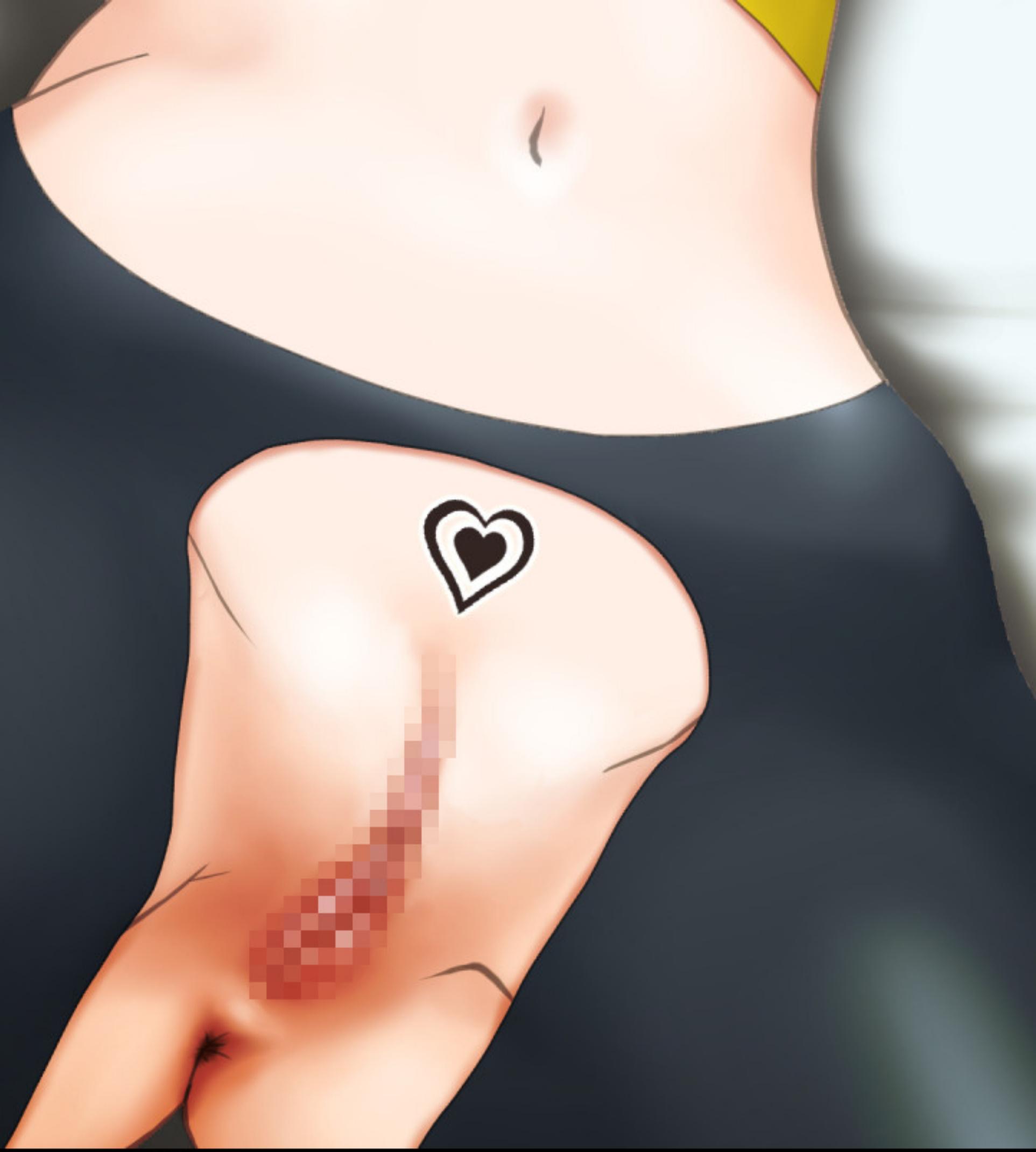
右京

「いまごろ気づいたか。それは改造済みの刻印だ、一生消えることはない」

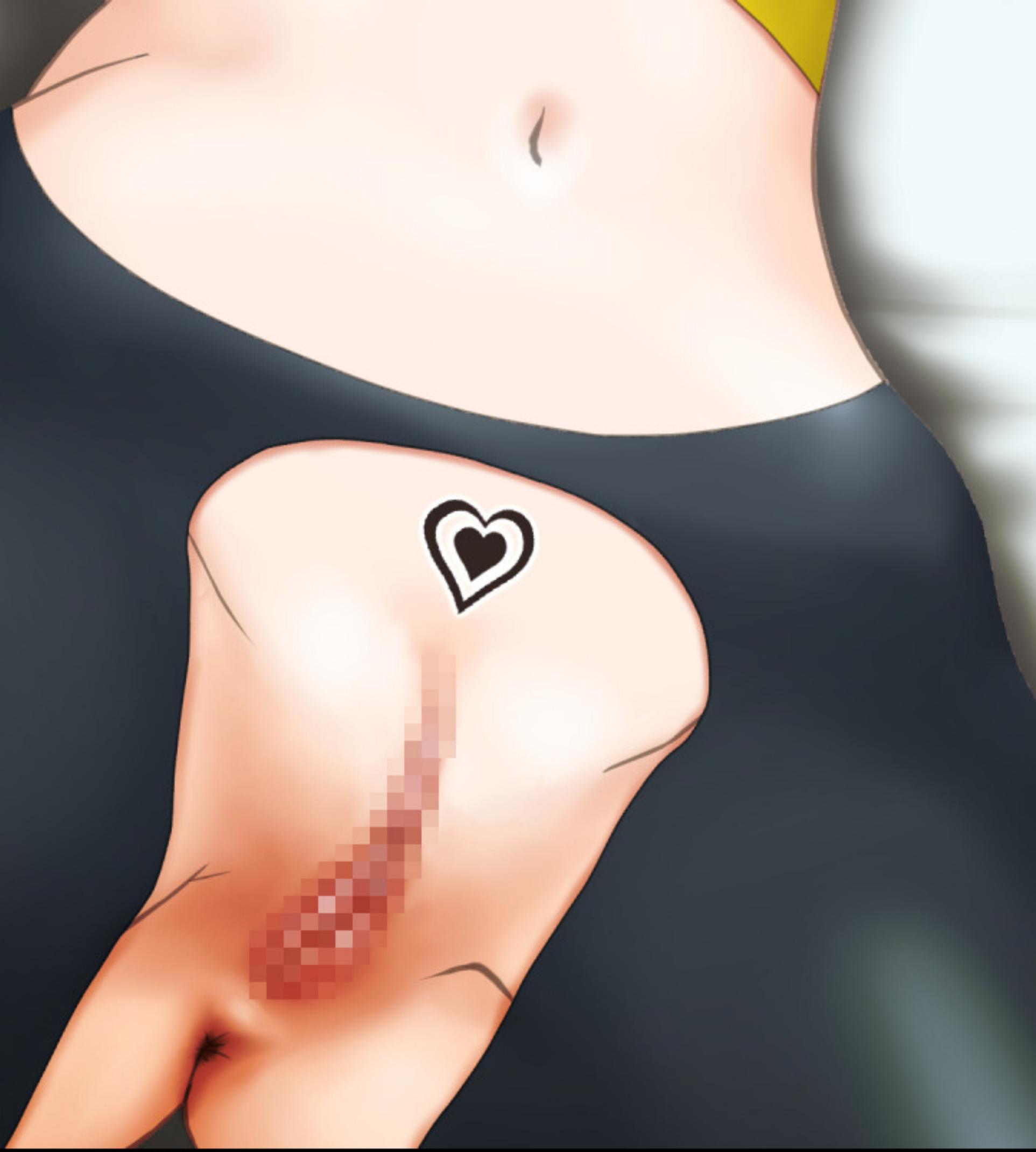


実 琴

「そ、そんな……そんなあ……」

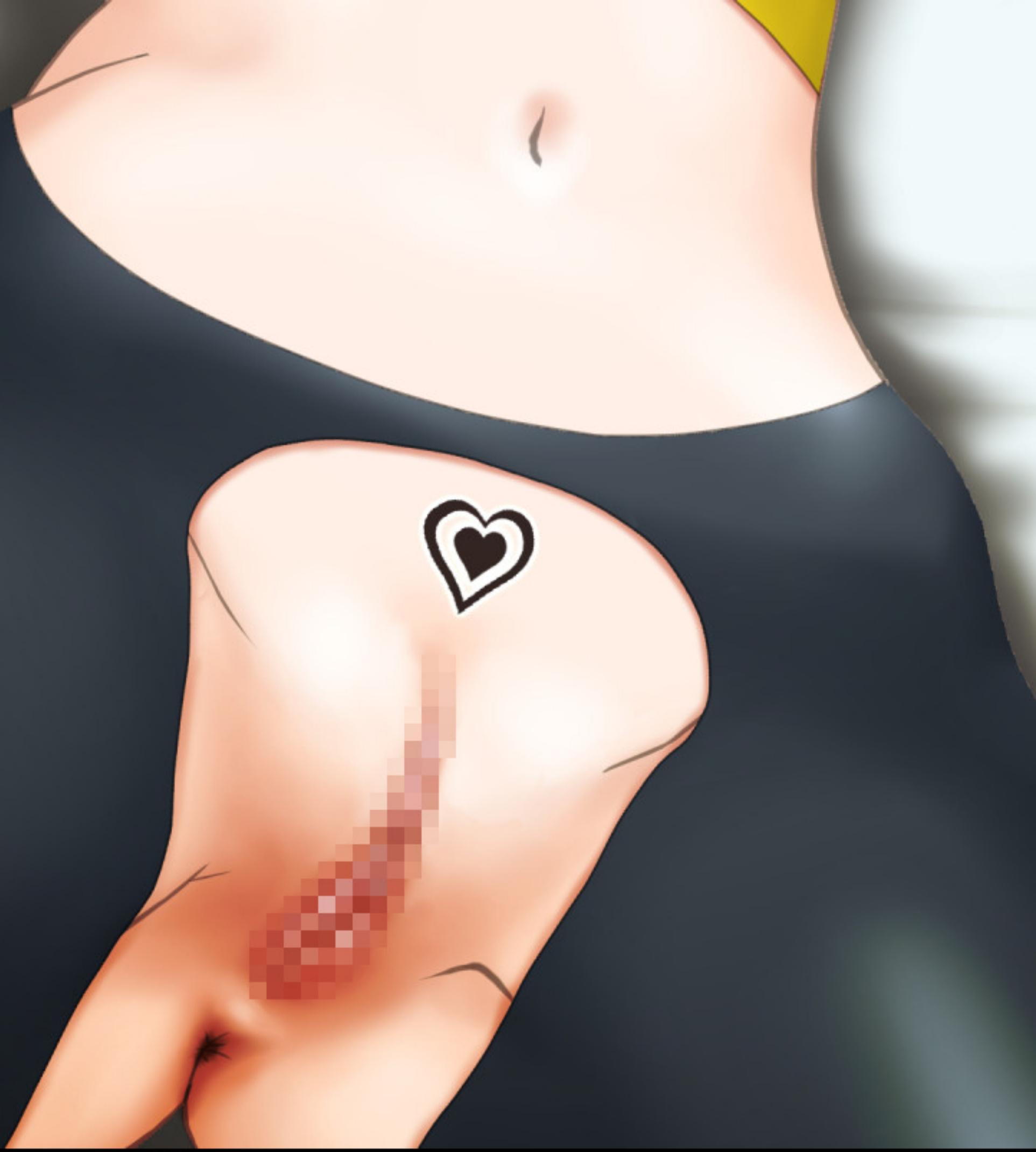


絶望に染まる実琴の顔を見て、にやにやする右京。実のところ、消そうと思えば簡単に消えるものだ。しかし、それを懇切丁寧に教えてやるつもりはない。取りかえしのつかない身体にされてしまったと思ってもらった方が、いろいろと都合がいいからだ。



実 琴

「あつ、ううつ、やつ、あああつ……」



そうこうしているうちに、実琴の上半身は完全に起きあがり、体育座りの格好になった。さらにぴったりくっついていた両膝が、左右に離れていく。



実 琴

「いやっ、いやああああああーっ！」



とうとう右京の前で、大股開きの格好をさせられた。寝ていたときよりも、露出しているという思いが、実琴の羞恥心を増大させる。



実 琴

「みつ、見ないでっ……ああっ、こんなのっ
……」



右京

「見るためにやらせてるんだから、見ないでと言
われても困る。さあ、自分で開くんだ」



実琴の両手が意志に反して動き出す。



実 琴

「あああっ、いやあっ、どうしてっ、どうしてえっ!?」



戦士にしては意外なほど細くて華奢な指先が、左右の花びらにかかった。だが、そこでいったん動きがとまる。



右京

「……本当に、こうなっている理屈がわかってないんだな」



実 琴

「だ、 だって……」



右京

「いいか、変身中はマッハスーツのコアと装着者の中権神経が完全に連結する。その状態のまま、俺はスーツをハッキングして、おまえから制御権を奪った」



実 琴

「——っ……」



右京

「やっと理解したか？ おまえはもう、俺が命じたことはどんなんことでもやる、操り人形なんだよ」



実 琴

「そんな……ああ、そんなあ……」



信じたくはないが、これまで男のいいなりになっている自分がいる。いまも指を秘部から離そうと力を込めるが、身体は右京という主の命令を厳守するかのように、ぴくりとも動かない。実琴の胸に、強烈な絶望感が拡がっていく……



右京

「さあ、マッハイエロー、おまえが処女だという
証拠を見せてみろ」

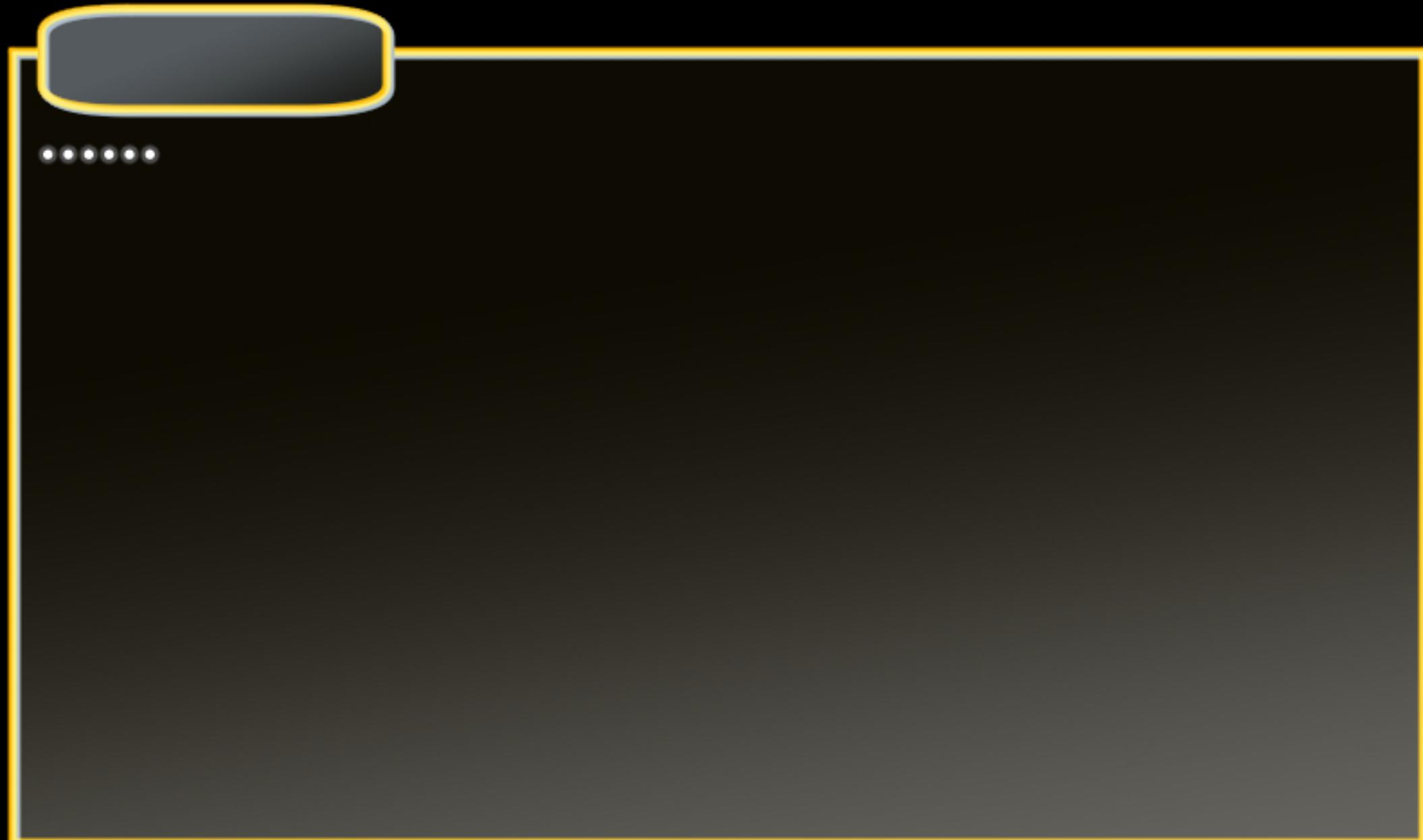


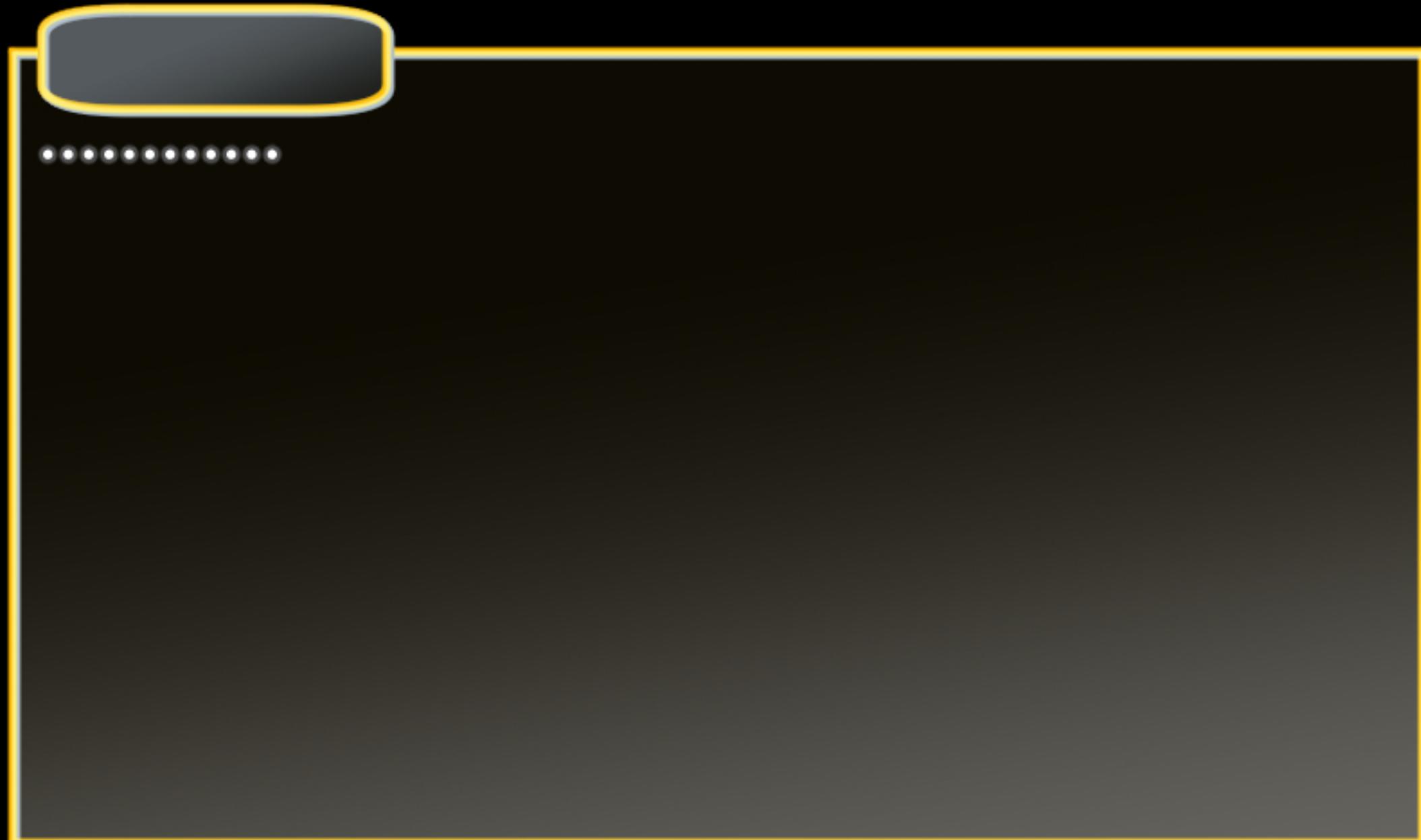
瞬間、実琴の指先がぴくっと動き、左右の花びらをしっかりと引っかけた。

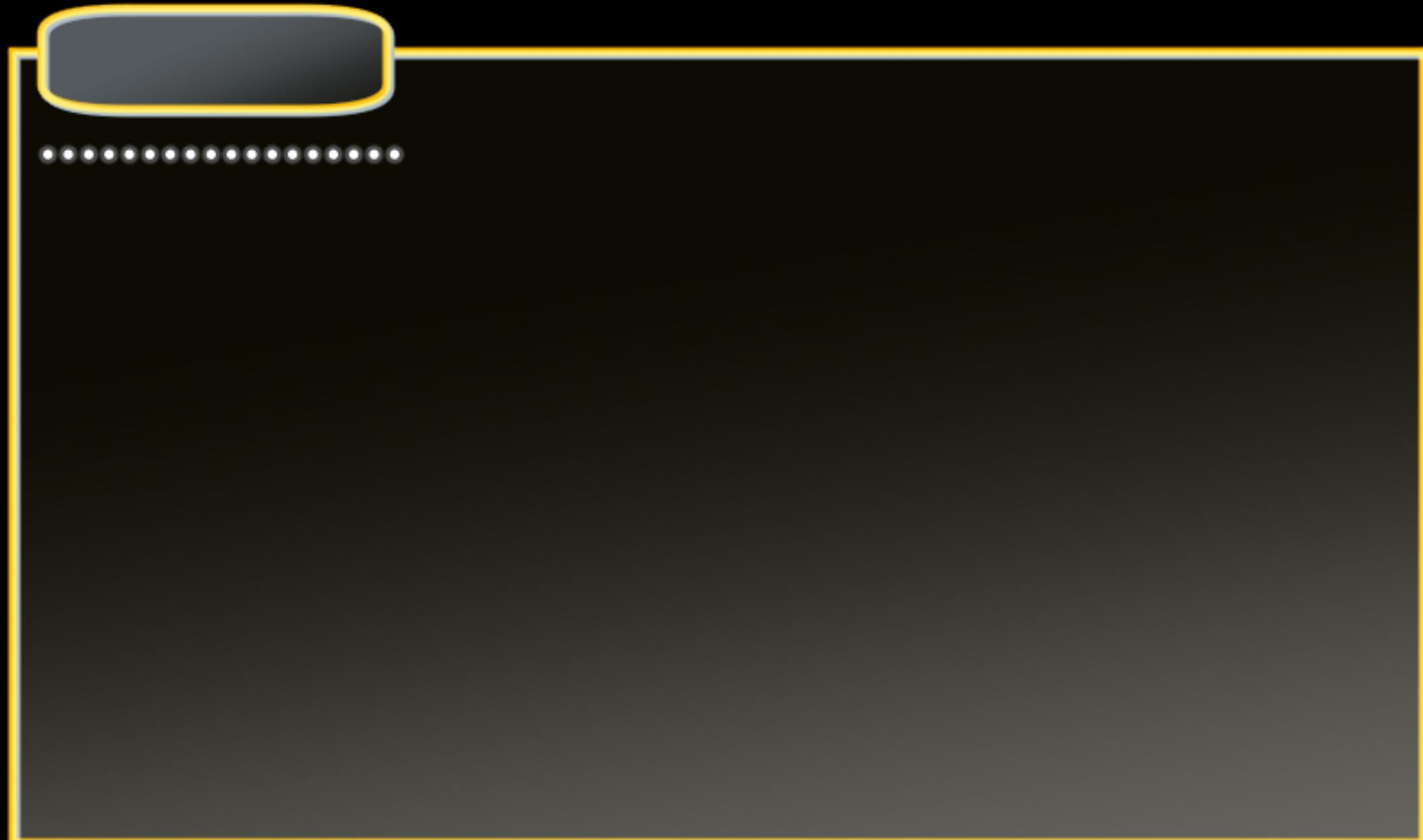


実 琴

「ダメっ、ダメっ……ああああつ、いやああああ
あああーっ!!」









マッハスースによる束縛を解き、実琴の鼻先に
ずんとペニスを突きつけた。

瞬間、かぐわしいザーメンのにおいが、実琴の
鼻孔に襲いかかる――



実 琴

「んああ……ん……れろ……」



操られるかのように、実琴は舌を差し出して右京のペニスをペロリと舐めた。ほしかったあの甘美な味が、口いっぱいに拡がる。



実 琴

(こ、これえ……)



実 琴

「んつ、 むふつ、 れろつ……んんつ、 えろつ、 ん
うん……」



遠慮がちだったのは最初のひと舐めだけ。実琴はようやくミルクにありついた野良猫のごとく、必死にペニスを舐めはじめる。



実 琴

「れろつ、ちゅつ……ちゅくつ、んふつ、れ
ろつ、んつ、ちゅつ……むふうん……」



右京

「そんなに俺のチ○ポはうまいか？」



実 琴

「んふっ……れろっ……ちゅく……」



右京

「俺のチ○ポはうまいか？ と、聞いている」



実 琴

「つ……んんつ……むふつ……ふ、ふあい……」



ごまかしきれず、実琴は恥ずかしそうに頷いた。認めるのはくやしいが、本当においしいのだから仕方がない。なにより、右京の不興を買って、行為をやめさせられたくなかった。



右京

「そうか。そんなにうまいんなら、今後は命令されなくても、俺が射精したあとは必ず後始末ができるな？」



実 琴

「むふっ……んんつ、れろつ……んふん……」



今度はほとんどためらいなく頷いた。後始末という行為に屈辱を感じないわけではない。しかし、今後も精液を味わえる喜びが勝った。そもそも、右京がその気になれば、自分の意志にかかわらずやらされてしまうのだ。拒否したって意味がない。



右京

「よし、だいぶ物わかりがよくなってきたな。それじゃ今度はチ○ポを咥えてみろ」



実 琴

「え……？」



右京

「尿道にたっぷり残ってるザーメンを、一滴残らず吸いあげるんだ」



実 琴

「つ……」



尿道という単語を耳にして、ペニスが排泄器官でもあることをあらためて意識した。それを口いっぱいに頬張る行為は、舐めるよりもずっと不潔感が伴う。しかし、その奥に甘美な汁の鉱脈があるとわかった以上、ザーメンジャンキーと化した実琴はもう抗えない。



実 琴

「ん……はむう……んつ、ふうううううう……」

抜粋体験版はこれで終了です。続きは製品版でお楽しみください。